

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1218 号	氏 名	宗像 諒
論文審査担当者	主 査 古庄知己教授 副 査 清水公裕教授・藤永康成教授		

(論文審査の結果の要旨)

椎弓根スクリューの開発により、思春期特発側弯症 (adolescent idiopathic scoliosis ; AIS) Lenke type1A カーブに対する後方矯正固定術は、矯正能力・固定保持能力の進歩により術後結果は向上してきた。しかし術後に冠状面バランス不良を来す症例はいまだに存在し、術後の良好な冠状面バランスを得るための明確な固定範囲決定方法への一定の見解はない。宗像らは、AIS Lenke type 1A カーブにおいて、術後の良好な冠状面バランス等を得るための固定範囲決定方法を検討した。

宗像らは Modified Shinshu Line; MSL を考案し、検討した。術前 X 線で実際の手術の上位固定椎 upper instrumented vertebra (UIV) が MSL により想定される UIV と一致している群 (M 群)、頭側にある群 (P 群)、尾側にある群 (D 群) に分け検討した。

当院を含めた多施設における AIS Lenke type 1A カーブを有する患者で術後2年以上フォローアップ可能であった 45 例を対象とした。測定項目は術前・術後 2 年時での、C7 Plumb line と CSVL の距離 (C7PL: 体幹バランスの指標)、clavicle rib inter angle (CRIA: 肩バランスの指標)、主胸椎カーブの Cobb 角 (カーブの大きさ) とその矯正率、apical vertebral translation (側弯頂椎の側方偏移)、SRS-22r (患者立脚型アンケート)、矢状面バランス (SVA, T5-12, T10-L2, T12-S1 後弯角) とし、それぞれ M 群をコントロールとして Dunnett の多重比較を施行した。その結果、宗像らは次の結果を得た。

1. M 群では、P 群、D 群と比較し C7PL、CRIA とともに有意に優れた結果となった。
2. M 群に対し、P 群、D 群では、術後冠状面バランス不良との相関があった (オッズ比はそれぞれ 16.0、9.3)。
3. 矯正率は、M 群では、D 群に比して良好な傾向にあり、P 群に比して劣ることはなかった。
4. 矢状面バランスは各群間で有意差は認められなかった。

これらの結果より、Lenke type1A カーブに対する後方矯正固定術において、MSL を用いた新しい UIV 決定法により、矯正率、矢状面バランスを落とさず、より良好な体幹・肩バランスが得られることが明らかになった。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。